

はじめに——本書のテーマとアプローチの視角——

『民衆と天皇』。本書のタイトルを見て、天皇の方が先、いや、天皇が上にくるべきだろうと感じる読者も多いことと思う。だが、実は民衆の方が先にくるこのタイトルにこそ、本書のねらい、私たち二人の主張が込められている。

いうまでもなく、天皇家をめぐる問題については、学問的な議論にとどまらず、政治的な立場の対立も含めて、戦前以来、枚挙に暇がないほどの議論がなされ、その論点も多岐にわたる。これらの議論の全体像を詳細に跡づけることは、本書のテーマからズレてしまうが、題名に天皇と冠した以上、最低限の説明は必要だろう。そこで、厳密性に欠ける強引な整理だとのそしりは重々承知の上で、これまでの議論をあえて無理矢理に分類してみると、以下の二つの立場に大きく分けることができる。

一つは、古代以来今日に至るまで連綿と続く天皇の地位の「万世一系」性を重視し、これこそが日本の伝統そのものとみなす立場である。それは、天皇が統治する日本という国家を手放して美化する戦前の皇国史観に系譜を持つが、最近ではどちらかというところ、象徴天皇制の「定着」といった事態の進行を受けて、権力者としての天皇ではなく、日本の文化や宗教的祭祀の中心軸・シンボルとしての天皇の「万世一系」性を強調する文化論的な議論がクローズアップされてきている。

もう一つは、マルクス主義的な天皇制論の系譜を引き、近年のナショナリズム論や国民国家論とも深く関わる立場である。こちらは、天皇制がすぐれて近代の産物であり、近代に創出された「国民」統合のための政治的な装置であったことを重視する。ここでは、近代国民国家による統治システムとしての天皇制を核心に据えて議論が展開されるため、天皇の「万世一系」性などはあまり問題視されず、武家が政治権力を握っていた時代にも天皇の系譜が途絶えずに続いた「事実」については、時々々の権力者による天皇の権威の政治的な利用といった、多分に偶然的な要因を強調する説明がなされるにすぎない。

この二つの見解の対立は、単に右か左かといった政治的なレベルでの立場の違いだけで片付けられる問題ではない。より学問的に突き詰めると、日本独特の生活文化や伝統を重視する「日本特殊性論」の立場に立った天皇論か(前者)、はたまた、個別の地域や民族の違いを超えた世界史レベルでの国民国家の普遍性・共通性を重視する「普遍性論」の立場に立った天皇論か(後者)の違いとして把握できる。

少し詳しく説明すれば、前者の立場と後者の立場の対立は、民族を「エスニシティ」(エトノス)としてとらえる天皇論(前者)と、「ネイション」としてとらえる天皇論(後者)の違いとみなすこともできよう。「エスニシティ」も「ネイション」も、日本語に訳すとみな「民族」となるが、前者は言語・生活習慣・文化等の一定の共通性にもとづく社会集団を指し示す概念であり、したがって、前近代においても「エスニシティ」は存在する。一方、後者は「想像上の共同体」として立ち現われた近代国民国家のメンバーを意味する「国民」とほぼ同義の概念であり、当然ながら「ネイショ

ン」なるものは、近代に固有の歴史的産物だと考えられている(民族と「ネイション」をめぐる諸問題については塩川「二〇〇八」を参照)。

こういった大きな問題にこれ以上深入りするのは差し控えたいが、忘れてならないことは、一見したところ決定的に対立するかに見える両者の立場が、実は本質的な部分で意外にも共通するという事実である。それはどのようなことか。ひと言でいえば、どちらの立場も天皇と民衆の関係性を論ずる際、あくまでも天皇が主体で、民衆は単なる客体にすぎず、「天皇、あるいは天皇の威を借りた時々の政治権力者により、民衆はいかに教化され、支配されたか」といった論理構造をとっているのである。

私たち二人が問題としたいのは、まさしくこの点にある。本書の題名が『天皇と民衆』ではなく、『民衆と天皇』となっているのは、こうした理解を逆転させ、地域社会において特権的な地位を保持した有力住民による、自らの権益確保のための営為が、結果として、戦国時代以降も天皇の地位が存続した、一つの、それもかなり重要な要因となった事実を、戦国時代から近代に至る長いスパンで明らかにしたいと考えたからにほかならない。

もちろん、民衆を主体に据えて、民衆が天皇をどのように認識し、いかなるプロセスを経て天皇を受容したかという観点から、民衆と天皇の関係を通時代的に論ずる作業が、文字通り「言うは易く、行うは難し」の難問だということは、十分に承知している。

だからこそ私たちは、「民衆にとつての天皇」なる問題を歴史的に論じることが可能な唯一のフィールド、京都市右京区京北の現山国地域・現黒田地域の事例を素材にして、この問題と格闘する

ことにしたのである。

ここで本書のフィールドについて補足すると、二〇〇五年に、いわゆる「平成の大合併」をするまでは、京都府北桑田郡京北町に含まれており、さらに遡ると、北桑田郡の山国村と黒田村とからなる同地(以下、旧山国村の範囲を本郷〔八ヶ村〕あるいは山国地域、旧黒田村の範囲を枝郷黒田三ヶ村あるいは黒田地域と表記する)は、京都市内とはいっても、昔の国名でいえば、市街地が所在する山城国ではなく、丹波国に属する。

京都市の中心部から同地に至るには、晩秋ともなれば紅葉狩りの観光客で賑わう高雄の神護寺や梅ノ尾の高山寺といった名刹を経て、北山杉の美林を抜ける周山街道ルートが一般的だが、右に左にカーブが続く山あいの道を車で一時間ほど北上して、周囲を丹波山地の山々に囲まれた同地にたどりつくと、そこには、私たちがイメージする古都とはまるで別世界の、のどかな田園風景が広がっている。

秋たけなわの一〇月上旬の日曜日。山国地域(本郷)では「山国さきがけフェスタ」というイベントが盛大に催され、たくさんの見物客が沿道を埋める。この行事は五穀豊穰を祝う秋祭りでもあり、山国地域内の鳥居集落(現京都市右京区京北鳥居町)に鎮座する山国神社をあとにした神輿が各集落(本郷八ヶ村)を勇壮に練り歩くさまは、それだけでも一見の価値があるが、他の地域の秋祭りで見ることができない最大のアトラクションは、何といっても山国隊の行進である。

山国隊。それは山国地域の歴史を物語る上で欠かせないキーワードであり、同地のシンボルといつてもよい。戦国時代の山国・黒田地域は、山国荘やまぐにのしやうという名の禁裏領きんり(天皇家直轄領)荘園しやうえんであつた

はじめに

のような心持ちになる。

このように、山国荘の故地は中世以来、天皇家との結びつきが強い土地柄であって、そこには民衆と天皇の関係を論ずる上で参考になる史料が時代を超えてたくさん残されているが、こうした史料的条件に恵まれた場所は、実のところ他にはまったく見当たらない（そもそも、同じ地域で中世から現代に至るまで連続して史料が残るケース自体、山国荘地域以外には、全国どこを探してもほとんどない）。その意味で同地は、本書のテーマにうってつけのフィールドだといえる。



山国さきがけフェスタ

（以下、山国・黒田の両地域を合わせて山国荘地域〈中世〉、または山国郷地域〈近世〉と呼称する）。この山国荘の名前が一躍有名になったのは、明治維新の戊辰戦争のおりに組織された山国地域の農兵隊——それは、山国隊と呼ばれた——が因州藩の傘下に入り、何名もの犠牲者を出しながらも、その一部は遠く仙台まで転戦したことによる。「山国さきがけフェスタ」というイベント名も、山国隊の隊士たちがかぶった陣笠に「魁^{さきがけ}」なる文字が刻まれていたことに因んで名づけられたものだが、この祭りにおいて、山国隊の功績を顕彰するために、行軍のおりに奏でられた鼓笛のメロディに合わせて、隊士に扮した住民の方々が行進するさまは圧巻であり、あたかも明治維新のさなかにタイムスリップしてしまったか

それでは、何はともあれ読者のみなさんを、山国荘の歴史世界にご案内しよう。なお、本書の執筆分担当が、主に中世から近世前期にかけての一章～四章を坂田が、主に近世後期から近代にかけての五章～九章を吉岡が、それぞれ担当した。

目次

はじめに 1

一 民衆の家と天皇―家と家格の成立―……………11

- 1 民衆の家の成立過程 13
- 2 宮座と家格 19
- 3 本章のまとめ 25

二 中世の禁裏領荘園と天皇・朝廷―丹波国山国荘―……………27

- 1 山国荘の歴史をひも解く 27
- 2 『御湯殿上日記』に見る山国荘と天皇家 31
- 3 戦国時代の山国荘 35
- 4 本章のまとめ 41

目次

三 由緒書と天皇伝承——「山国荘名主家由緒書」の世界——……………43

- 1 「由緒書」成立の背景 44
- 2 「山国荘名主家由緒書」の構成と類型 47
- 3 「山国荘名主家由緒書」の完成版と本郷住民 57
- 4 本章のまとめ 60

四 書きかわる家の歴史——「西家永代書留」と「古家撰伝集」——……………67

- 1 「由緒書」としての「西家永代書留」 67
- 2 本郷の名主家と「古家撰伝集」 74
- 3 本章のまとめ 80

五 近世の民衆と天皇・朝廷……………84

- 1 網 役 86
- 2 有力百姓は天皇・朝廷に何を求めたか 92
- 3 近世大嘗祭と山国・黒田地域 97
- 4 本章のまとめ 107

六 幕末の動乱と民衆の葛藤——山国農兵隊結成への道——……………110

- 1 常照寺と有力百姓の対立……………112
- 2 農兵隊の結成……………121
- 3 本章のまとめ……………126

七 山国隊と戊辰戦争……………129

- 1 第一陣・第二陣の対立と山国隊の関東出征……………129
- 2 京都出発から江戸到着まで——山国隊の出征1——……………133
- 3 安塚の戦いから東北出征まで——山国隊の出征2——……………140
- 4 京都への帰還……………149
- 5 本章のまとめ……………153

八 揺れる明治の勤王観——戊辰戦争後の山国農兵隊隊員たち——……………156

- 1 山国隊隊員の苦悩……………156
- 2 士族編入活動……………163
- 3 本章のまとめ……………173

九 二〇世紀の民衆と天皇・国家……………176

- 1 明治後期～大正期の山国社と山国村住民 177
- 2 「勤王山国隊」の誕生——昭和戦前期の山国村—— 186
- 3 勤王のゆくえ 200
- 4 本章のまとめ 209

おわりに 214

参考文献

あとがき